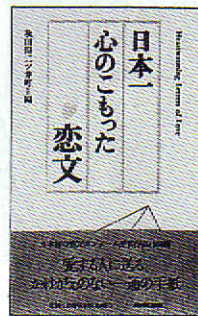


あけましておめでとございませう

年賀とも寒中見舞いともつかない時期になつてしまいました。言い訳ではありませんが、二ツ井町にある県立自然公園きみまち坂にちなんだ「きみまち全国恋文コンテスト」の審査に思いのほか手間取りまして、どなたにも失礼さしていただききました。その審査も終わり、さる一月十三日町役場で審査発表会が行われました。全国から寄せられた恋文の七千三十五通という数にまず驚きました。実に感動的な数字でした。それぞれに何十年もの間、言えなかつたであろうこと、胸につかえていたはずのことが切々と伝わってくるのでした。



能代高校や二ツ井高校で永年教師を勤めた私は、非常にたくさん生徒の作文に目を通してきました。そしていつも生徒の作品の中に一行でも半句でもいいところはないだろうか、という気持ちで見えてきました。そういう立場で人の文章を見てきた私が、だれも代弁できない大切な本心に、あるいはその人のかけがえのない歴史に、どうして優劣などつけられましようか。

とはいうもののコンテストでもあり、百一点を選んでNHK出版から一冊の本として出版するという企画もありますので、審査委員として心ならずも取捨選択を迫られるのでした。

非常にづらい仕事でした。ところで、よく考えてみると、「好きだ・愛している」という言葉は、日常は日本人の生活の中でほとんど使われていないのですね。だから逆に、だれにもその「好きだ・愛している」という言葉を一度自分の胸の外に出してみたら

つた、という思いがあるわけです。

この度応募作品のすべてに目を通してみて、一人の人を「好きだ」とか「愛している」という言葉には、大変な重みがあるのだということを実感しました。そしてその言葉の重みが、手紙を書くエネルギーになっているのでは、という感じがしたのです。

男性の場合、五十年代、六十年代、七十年代という年配の方々からの手紙もたくさんありました。この年代は当然のこと、そこにあの戦争がからんできます。戦争をはさんで、今から五十年、

だれしも一度は、愛しているの

一言を吐露してみたい

六十年前の日本の男女交際の状況は、今ではとても想像し得ないほどの大変な時代でした。

日本の男性はだれしもすべてを投げうって、戦場に出てお国のために奉仕しなければならぬと、教え込まれていました。しかし、その徹底したマインド・コントロールにもかかわらず自分の本心をあの人だけに残しておきたいという気持ちは、戦場に消えていった数多くの若者の一人ひとりの胸にあつたのです。

いよいよ戦争に行くことになった。あるいは出撃の前夜を迎えた。そこで、今までの思いを手紙に託してあなたに残したい。この手紙は、実際には出せなかつたという場合が多いのですが、それを改めてここに発表する、という形のものも多く見られました。

もちろん若い人には若い人なりに、筆を執ることで、八百字の中に、身近な人への思いを見事に凝縮させた作品もありました。

全体を通して感じたことは、愛というもののもつ力の不思議さ、そして愛というものを表現するための手紙というメディアの力強さです。手紙に表された文字、言葉の力を信じて、訴える力を信じて、手紙を自ら筆を執って書く、そのすばらしさを改めて実感して、今、年賀状をしたためています。

末筆ながら、今年もよい年でありますように祈ります。

平成七年一月十五日

白鳥邦夫



秋田県ゆかりの審査委員（左から）内館牧子さん、西木正明さん、白鳥邦夫先生、島森路子さん、佐藤嘉尚さん

平成六年度能代高校東京同窓会総会開催

平成六年十月七日・午後五時
於 茗 溪 会 館

第一部 講演会
第二部 総会
第三部 懇親会

第一部 講演会

執熟年からの健康

関根市男氏 新制十一期



新制十一期の関根市男でございます。本日は熟年からの健康ということで、特にその中でも脳卒中と、虚血性心疾患、心臓病ですね、それらに共通している症状、カイロプラクティック治療を行っている私の所見ですが、非常に症状が似ておりまして、これについて述べていきたいと思っております。

なお本日、この機会を与えて下さった関係各位のみな様に心から感謝申し上げますと共に、来賓各位のみな様、諸先輩のみな様を前に、高

い所から申し述べますことは、はなはだ僣越でございますが、あしからずご容赦下さい。

まず能代が、市政施行なさったのは、市長さん、十五年の十月一日でしたよね。巷では、市政施行の祝賀会で非常に沸いておったということですが、ちょうどその日、その時刻にうちの母親が、「おめでたでございませう。三カ月ですよ」ということであつたそうです。そこで親父はもちろん家族一同、これは能代市の授かり物ではないかということ、生まれたら、男だつたら国のためでなく、市のために尽くす男になつてもらいたいということにつけた名前が、市の男で関根市男ということでございます。ひとつ今後とも市のためにということ、お見知りおきを願いたいと思ひます。

ところが、十八歳と三カ月です、親の願いと裏腹に、縁がありまして、航空自衛隊に奉職いたしました。以来三十五年、全く親不孝を重ね、能代不孝という言葉はないでしょうか。でも、能代不孝を重ねております。そのうち市のためにと心に念じながら、本日に至つておりますけれども、市長さん、そのうちに、そのうちにでございます。よろしく願ひします。

で、航空自衛隊の私がですね、何でお前がカイロプラクティックやっているんだとよく質問受けるのでございます。これについては、三十四歳の時、ちょうど働き盛りでございます、この時ギククリ腰をやりました、椎間板ヘルニアで完全に下半身不随になつてしまつたんです。以来四年間、寝たつきりの生活を送りました。これが昭和五十年の九月でございました。とこ

ろが私、血を見るのが嫌いでございまして、もう切られるのがいやで、お願いいたしました。逃げようように病院を無理矢理退院しました。それが五十四年の十月の末、以来七カ月間こんな格好で苦しんでいた訳です。で、何でこうなつたかという原因でございませうが、ご年輩の方はご存知と思ひますけど、航空自衛隊といひますとスマートでございまして、私の仕事といひますは飛行機の誘導管制なんです。座つたまま商売できるような楽な仕事です。けれども、生まれ育ちは戦中ですから、鬼畜米英で育ちまして、柔道、剣道、銃剣道、居合道、というのが私、得意でございまして、銃剣道のやりすぎで腰を痛くしたんです。なつかしい人もいると思ひますが「エイ！ ヤー！……」って、これで腰を痛めてしまつたんです。

それでまあ、七年間苦しんだ訳ですけど、いろいろな治療をしてその結果何を待たのかといひますと、このままで終わりがたかない、ということ、必死になつて腰痛とは何か、腰とは何かということを深く勉強するきっかけとした訳です。それで、アメリカではカイロプラクティック大学というのがあつて、そこに脊髄神経専門の医者さんがいることを知つた訳ですね。それで、一生懸命捜して、五十七年の七月、やつとその先生に巡り合つて治療して頂いて健康を取り戻したと、こういうことでございます。それから私がその道につつこんだ訳です。ところで、カイロプラクティックについて、ちよつとご説明いたします。

約百年前、アメリカのダニエル・デビット・